OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	隠喩における真理
Author(s)	菅野, 盾樹
Citation	大阪大学人間科学部紀要. 1984, 10, p. 47-76
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10282
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

隠喩における真理

菅野盾樹

隠喩における真理

隠喩の二つの無能力

なによりも精確を言語の旨とした経験論者たちは，隠喩をはじめとすることばの文彩をながらく貶めてきた。文彩などのまじり気のない言語だけが意味をあらわし，事実を指示し，知識を担う。これにひきかえ文彩なされた言語は，そうした点においてまったく無能だ。これが彼らのきめつけだった。たとえばホッブスは，人びとが語を比喩として用いることによって他人を欺くことを，ことばの悪用として非難しているし[1]，また推論のさい人が背理におちいる一つの原因を，やはり比喩の使用に見いだしてこう述べている。

（背理の一つの）原因を，わたくしは，本来の語の代りに，隠喩や比喩やその他の修辞上の言葉のあやを用いることに帰する。なぜならば，（たとえば），日常の言葉においては，その道がここやあそこに行くとか導くとか　諺があれやこれやいっているとかいうのは，（道は行くことができず諺は話すことができないにもかかわらず），正当ではあるけれども，真理についての計算や探求においては，このような言葉は許されるべきことではないからである[2]。

同じようにロックも文彩へのあらわな軽侮を示しながら，比喩の使用を言語のゆゆしい誤用の一つに数えて，こうきめつけている。

もし私たちがあるとおりの事物について話したいならば，私たちは次を認めねばならない。順序と明晰さの技術以外の，あらゆる修辞学の技術，雄弁術が案出してきたことばのあらゆる人工的・比喩的な適用は，誤った観念を暗示し，情緒を動かし，それによって判断を誤り導く以外のものではなく，したがって，実に完全なまやかしなのだ[3]。

文彩に意味と真理を拒むこのような伝統は現在にもおよんでいる。その例にはことかくことはないけれど，ほんの二，三のケースだけを指摘しておこう。すでに見たように，ディヴッドソンにとり，隠喩の意味を云々するのはばかげたことだ。それというのもただ文のみが意味を持ち，隠喩の「意味」とは文の使用の関数にすぎないからである[4]。こうした見方は

われわれに，いささか古い昔の言語探求のありようを想いださせずにはおかない。かつては，記号の語用論的側面がまるまる記号の意味理論の領域から排除され，別の場所へ追いやられていた。この状況が今や時間をへだて，今度は隠喩という問題にいわば平行移動されている，と評してはいけないだろうか。またローエウェンバークは，「もし＜真理＞という語に精確な意味を保存し，真理と一種の真理などというものの区別をあいまいにしない場合は」[5] 隠喩が真理値を欠く言明であるのがわかるだろう，と言う。というのも，そもそも隠喩まじりの言明は，本物の言明などではないからである。

意味拒否の動機

こうした見解には，もちろん，動機がないわけではない。その最たるものは次にある。表現のうち何が隠喩で何がそうでないかを決める単純で有限個の（といっても多数では困る，せいぜい四，五個の）手続き，言いかえれば隠喩の同一性基準，を発見することの不可能[6]。これにもう一つが加わる。隠喩を解釈するアルゴリズム，つまり手順を踏んで一揃いの規則を誤りなく適用しさえすれば必ずその一意的な解釈が得られる，といった手段がないこと[7]。まっとうな文が問題なら，文の意味は文法によって規定されているはずである，それというのも，もしそうでもなければ，いったい文法の探究とは何の役に立つのだろうか。このように，そもそも＜文法＞という理念には，文の意味が文法により決定されるはずだという要請がともなうのである[8]。隠喩にかんしては解釈のアルゴリズムがない，ということは，したがって，隠喩には本物の意味がない，あるとしてもそれは「隠喩的」意味，「詩的な」それ，一種の情動的な，認識価値を欠くまがいものだとされてしまうのである。

二つの動機とも，まことにもっともだとわれわれは思う。ただし，だからといえ，隠喩への意味の拒否が，これらの動機により正当化されることにはならない。問題の核心は＜意味＞というものの考え方にあるだろう。経験論者はややもすると，意味というものをいわば事物とならぶもう一つの事物，第五元素（quinta essentia）のようにみなしがちなのではないか。漠たる意味などは，彼らにしてみれば，およそ意味ではない。意味は精確でなければならぬ。この格率はむしろ意味そのものの存在様態を述べているのであって，この格率から＜不精確な意味＞といったもののなんらかの意味での容認を抽きだすのはおかどちがいだろう。たとえ漠たる意味がありうるとしたところで，彼らにすれば，それは漠然とした意味としてどこまでも明確な意味でしかないのである。ターナーのように，おぼろな大気や定かならぬ光線の描写にたけた画家の絵を考えてみよう。たとえ画布のうえの形象が漠たるものであっても，だからといえ，その絵が絵でなくなるわけでは決してない。それは漠たる形象をあらわす絵であり，絵であるかぎりいささかの曖昧さもない，その意味で明確な絵にほか

ならないのだ。こうした意味の捉え方は，実は，ただ経験論者に固有なばかりではない。およそ意味なるものに懐疑的なクワインのような人やある種の唯名論者（グッドマンを例にあげられるだろう）を除いて，意味理論にかかわるほとんどすべての論者が，どうやら類似の考えをいだいているとおぼしいのである。われわれはこの先入主をきっぱり捨てねばならない。かわりに，本質的に漠たる意味，あるいは知覚に関連してメルロ＝ポンティが述べた用語を借用すれば，本質的に＜両義的な＞(ambigu) 意味を認めねばならない。いやむしろ，意味とはそもそも両義性を身上とするのであり，経験論者が意味の原形と見誤まった明確な意味は，本来の意味の展開の形式，洗練を施された意味であるか，もしくは意味とは別ものであるか（この二つをしばらく＜超意味＞とよぼう），そのいずれかであろう。意味の意味の革新にあわせて，われわれの文法概念も手直しされねばならない。意味と超意味の関連を記述することや，文法概念の具体化などは，ここでとりかかるにはあまりに大きな仕事である。ここではたんに，二つのもっともな動機が，必ずしも正しくはないことの確認にとどめておきたい。

意味は真理に先立つか

隠喩に意味と真理をそれぞれ拒む二つの見解は，独立のものではなく，実は関連しあっている。多くの人びとは，意味と真理の関係について次のように見なすのである。ある発言の真偽を定めるには，それに先立ってその意味を確定しなくてはならない，と。意味は真理に先行するのだ。つまり，(1)意味を欠く発言は真でも偽でもありえないが，逆に，(2)真理値を欠く発言でも有意味な場合がある。たとえば，

（1a）　色の無いが眠るの観念猛烈に緑色。
（1b）　色の無い緑色の観念が猛烈に眠る。
（2）　日本国大統領は近眼である。

などがそれぞれの例になるだろう。（1a）はあたかも重症の失語症患者の発言のように文法がでたらめで，一読して無意味であり，まして真でも偽でもない。（2）にかんしては，わが国は共和制をとっていないから，ストローソンのように解釈すれば，この文は偽というより的はずれであって真偽を云々できないのである。しかし（2）が意味をなすことは疑うことができない。

ところで問題は（1b）のタイプの文にある。語「観念」にかんする辞書の記載事項（生成変形文法で＜語彙項目＞(lexical entry) とよばれる）には，観念が無生物である旨が含ま

れているにちがいない。これにひきかえ，動詞「眠る」の語彙項目には，この動詞の主語に生物をあらわす語が立つことの旨が含まれているはずである。この点だけですでに（1b）が生成文法でいう選択制限違反を犯していることがわかる。あるいはまた，この文は哲学者ライルのいう＜カテゴリーの誤り＞(category mistake) に陥っていると見ることもできるだろう。動詞が文頭に来て次に助詞が，最後に名詞が並ぶというような文が構文をなさないのに比べれば，（1b）はある意味で文法にかなっている。それなのにこの文がノンセンスなのは，文法のことがらではなく，論理の不都合がそこに生じているからだ，とライルは考えた。すなわち，文の一要素の論理的タイプないしカテゴリーが他の要素のそれと適合していないのである[9]。ライルの考え方は，選択制限という文法上の機構の根拠を提供している。文法は，たんに，すでに設けられた制限について教えてくれるだけであって，制限の理由については言及しない。しかし，もしもある選択制限がなぜそのように設けられているかと問うならば，そうしなければカテゴリーの誤りに陥るから，と言わざるをえないだろう。

真理の遡及効果

ところで，カテゴリーの誤りに由来するノンセンスな文という確定した集合は存在するのだろうか。そのような仕方で，有意味な文と無意味な文の区別が，われわれの生きる言語空間のなかに絶対的に，あるいは，これを限りとして恒久的に，引かれているのだろうか。なるほど，ある時点で生きた言語を冷凍してしまい，その生理を停止して観察したならば，当該言語にそうした区別が事実上見いだされることがあるかもしれない。また話し手の言語能力（competence）あるいは言語知識に，この種の区別が備わるのも，経験上で確証しうることかもしれない。それには，一連の文を被験者に呈示して，（1b）のタイプの文だけがノンセンスとして分類されるかどうかを確かめればよい。また区別のアプリオリな存在証明としてこう言うこともできる。もし話し手がこの区別をわきまえていないとせよ，ゆえに彼は文法に適した語り方とそうでない語り方を無差別に行う，しかし意思疎通を保障するのは文法である，したがって，彼は意思疎通をなしえない，これは背理である，したがって，彼には区別が知られている，証明終り。以上の両様の議論を認めることは，しかし，そうした区別の絶対化を許すことにはならない。この区別はあくまで歴史的なものである。それは言語の歴史的展開につれてそれ自身変容しうるのだ。例をあげよう。

(3) イギリスはヨーロッパ大陸から来た。

もしかの区別が絶対的ならば，地質学者によって語られたこの文もカテゴリーの誤りのせい

で無意味と断定しなくてはならないだろう。生物や車が来ることがあっても，「島嶼が来る」という文にはタイプの不適合があると思われるからだ。しかし，大陸移動説（真理）はこの種の文へ立派な意味を付与する。ここにわれわれが認めるのは，「ある真理の発見が意味の諸限界に遡及効果を及ぼすことがある」[10] という事態にほかならない。意味の圏は決して固定されてはいないし，また意味の真理への先行を絶対的には揚言できないのである。このことはまた，話し手の言語能力と非言語知識ないし百科全書的知識の区別がやはり絶対的なものではないという系を含んでいる。たとえば語「犬」は名詞であり，生物をあらわすなどといった知識，またこの語は主語や目的語として機能するといった知識は日本語の話し手の言語能力の一部であるこれに反し，この語が相手をののしるのに使われうるという知識は非言語知識であり（言語にかんする知識ではあるが），まして犬を飼うには役所に届けねばならないという知識などは非言語的な，百科全書的知識にほかならない。知識のこの二分法はさまざまな点で正しい。しかし，その絶対化は認められないのである[11]。

ところで，真理と意味のこの相互性こそ隠喩の一つの成立根拠にほかならない。動詞「来る」の主語には，おそらくはじめは動物名だけが立つことができたのであろう。後年，自から動力をそなえているという点で動物になぞらえうる乗物（馬車，帆船，ずっと降って自動車など）が文字通りの意味で来るもののなかに加えられ，さらに一転して，擬人化されたかぎりの抽象物（不景気，時代，朝など）もその列に含められた。ここまでが「来る」の現代における字義性の範囲である。かつて比喩であった「自動車が来る」も「いやな時代が来る」もすでに死喩にすぎない。ところが今はまだ，磐石揺がぬものの代名詞である大地について，「それが来る」と語るのは隠喩以外のなにものでもないのである[12]。そして，現代においても，ある文脈にそれをおけば「大陸が来る」といった表現がまぎれもなく字義的意味を持つことを，今しがたわれわれは確かめた。このように，われわれは有限の材料をやりくりしながら，意味と真理の相互性を根拠に，表現へと身を賭してきたのである。この事態は，言語の本性にかんする重大な示唆がひそんでいる。いったい隠喩の可能性は言語のいかなる本性のうちに根ざすのだろうか。この問をしばらく後に主題として再びとりあげる予定でいる。

二回真の隠喩

これまで，経験論者らの言い分にことなり，隠喩に必ずしも意味と真理の可能性がないわけではないことを述べてきた。彼らの言い分の理由は正しくなかったし，問題は何より＜意味＞概念に横たわっていた。とはいえ，隠喩が意味を持ち，また真偽でありうることが積極的に証拠立てられたわけではないことも確かである。しかし隠喩の多くの例をよく眺めてみると，そのなかに明らかに真理値を持つものがあるように思われる。そうした例にすでにわ

れわれは出会っていたが，もしこの直観が正しければ，隠喩に真理値を拒む見解にわれわれは確かな反例を見いだしたと主張しうるのだ。二つ例を並べてみよう。

(4) I have climed to the top of the greasy pole.
(かつて脂だらけの柱の頂上まで登ったことがありました。)
(5) あの殺人犯は残忍な動物だ。

(4)は英国の宰相ディズレイリが昔語りに述べた懐古談の断片である。事実彼がその昔ここに語られた行為（それは何かの競技かもしれない）をおこなったとすれば，(4)は真である。しかも(4)は同時に隠喩としても意図され，多難だった政局について何事かを語っているのである。(5)もまた同じように，文字通りに解されても真である。殺人犯が動物分類上まぎれもなく動物に属するのは事実だからである。ただし(5)の文に強調の傍点が打たれているのは，この文がその部分に強勢を置いて発言されたことを表わしている。あたかも吐き捨てるように言い放たれたこの文は，実は同時に，殺人犯が道徳もなにも知らぬ動物あるいはケダモノだ，という隠喩まじりの表現なのである。この種の隠喩，すなわち文字通りに解された場合に真であるよう隠喩を，T・コーヘンは＜二回真＞(twice-true)である隠喩とよんでいる[13]。二回真の隠喩の存在はこれまであまり気づかれたことがなかったし，したがって，それのかかえる問題の検討にも乏しかった。今われわれは真である隠喩を目のあたりにしているのではなかろうか。経験論者らの真理の担い手としての隠喩否定に，反例が見いだされたのではないか。

字義性への還元

彼らの反論は直接聞けないので，それを代弁することにしよう。彼らはきっと，字義的／隠喩的という区別を持ちだすだろう。(5)はなるほど文字通りに解釈された場合に真である。しかし(5)が言いたいのはその字義的意味の方ではなく，むしろその隠喩的意味であろう。そもそも(5)は隠喩の一例ではなかったか。ここで，「隠喩的意味」を云々したからといえ，揚足をとらないでもらいたい。われわれはなにもそのような格別な種類の意味を認めているわけではない。(5)が使用されるとき，聞き手の側にある種の精神状態がかもされるだろう。それはもやもやとした気分情趣の類いであって，認識価値を有するまっとうな意味ではない。ただわれわれはことばを節約して誤解を招きやすいそうした表現を用いたのにすぎないのである。ともあれ，(5)に登場する語「動物」は決して文字通りの意味を表わしてはいない。それは＜野獣のような，道徳を欠く凶悪な人間，人でなし＞という意味で使われているのだ。

ちなみにこの意味は，これはこれで一箇の文字通りの意味である。したがって(5)は次のように言い替えられる。

(6)　あの殺人犯は，野獣のような，道徳を欠く凶悪な人間だ。

なるほど(6)は真でありうる。仮にこれが真だとせよ。しかし，だからとはいえ，(6)の原形である(5)が隠喩として言われた場合にそれが真であることにはならない。以上を一般的に述べれば，隠喩はそれ自体としては真理の担い手では決してなく，たんに字義的表現に言い替えられた場合にのみ，その資格をさずかるのである。隠喩を字義的表現へ還元する簡便な手法がある。それは直喩を使うことだ。それで(6)にも直喩「野獣のような」が，登場しているのである。

これが経験論者らの反論のあらましである。反論のポイントは，隠喩の字義的表現への言い替えが可能だということにある。この主張はわれわれの見地からは到底認めがたいものである。真の問題はそれはあの字義的／隠喩的の区別にある。というより，もっと詳しくいうなら，われわれのこの区別の理解と彼らの理解との違いこそが問題なのである。というのも双方とも，なんらかの意味でこの区別を容認しているのだから。

字義性の原理

そこでこの区別を明示したビンクリの記法[14]を用いて二つの文をあらわし，問題をあらためて調べてみよう。

(7)　アウル・ネルソンはゴリラだ。(隠喩として使用)

(8)　アウル・ネルソンはゴリラだ。(字義的に使用)

ちなみにアウル・ネルソンなる人物はアメリカとカナダを股にかけ一年半たらずの間に二十二人もの婦女子を殺し，新聞紙上で「殺人ゴリラ」の異名をとった犯罪者である[15]。話し手が(7)を発言するさい，彼は(8)を断言しているわけではない。言いかえれば，(7)には(8)に伴う発語内潜在能力が欠けている。にもかかわらず，(7)の発言は少くとも(8)をほのめかすか，暗に示すか，せざるをえないのである。同じことを隠喩の解釈過程の側から捉えることができる。つまり聞き手は(7)を受けとめたとき，あたかもそれが(8)であるかのように，字義的な解釈をまずすませなくてはならないのである。それが隠喩であれなんであれ，およそ発言の解釈はある原理に主導されている。それはレカナティのいう<字義性原理>にほかならない。

この原理は，次のように主張する。

ある発言内行為の潜在能力に属する行為を遂行する意図が話し手にない場合，彼はそうした発語内行為の潜在能力を有する文を発言するはずはない[16]。

この原理の働きを例示してみよう。AがBに向って「戸を閉めなさい」と言ったとする。この発言に用いられた命令文は命令という行為の潜在能力を持っている。それゆえこの原理によれば，Aの発言は命令を遂行しているものと解されるのである。この原理はややもすれば些細なことを述べていて，あまり値うちがないと思われるかもしれない。そこで次のような疑問が生じるだろう。耳に聞いて意味のある文（音列）を発することが，ただちに発言を構成するわけではない。これでは九官鳥の口まねも発言になってしまうからだ。意味をそなえた文が発言であるためには，話し手がそのような意味を表現しようと意図したのでなければならない。この条件を上の原理は述べているように思われる。したがって，話し手が字義性原理を守ると述べることは，話し手の発言行為がたんなる音列の構成ではなくまさに発話である，というにひとしい。このような原理が，発言の解釈に役に立つだろうか。——しかしこの疑問はいわば真面目な発話とそうでない発話の区別を忘れている。真面目でない発話というものが存在している。この場合，確かに話し手はたんなる音列を発しているわけではなく，何事かを語っているが，しかし，文がその実演を示している行為を，彼は実は行っていないのである。隠喩とはまさに字義性原理が反古とされた，真面目でない発話なのだ。

発言(7)において同時に文(9)が示されている。(7)と(8)の混同は隠喩の真理問題にかんして収拾のつかぬ混乱をもちこむだろう。発言(7)は偽ではない。偽であるのは(7)において示された文(8)なのである。しばしば論者は(7)を偽である，として，その観察から，隠喩は明らかな偽やノンセンスや矛盾など，なんらかの意味論的欠陥を持つ文であるという一般化をおこなうが，これは誤りである。

共有知識

では(7)自体は真でありうるだろうか。隠喩として使用された文が真理値を担うかどうか，この問はこれまで幾度も立てられてきた。しかし問の設定にのみ急で，問の正しい立て方については，あまり考慮が払われてきたとは思えない。(7)のような隠喩の真偽を問うには，つねにその解釈理論の枠組みに即して行なわれねばならないのだ。

一般に，発言された文の意味を解釈するには，聞き手がある範囲の言語能力（文法，語の意味などの言語知識）を持っていなければならない。しかし，これだけでは目的を達するの

に不十分な場合がある。その最も明らかな場合は文の言外の意味である。前にも出した例をまた引くと

(9) A：これから銀行に行ってきます。
　　B：今四時半だよ。

という会話で，Bの言わんとするものは何だろうか。Bの発言に使われた語の意味や日本語の文法の知識がAにあっても，それだけではBの発言の真意はわからず，Bはただ見当外れの受け答をしているとAには思われるだけだろう。しかしここに語用論的解釈機制が働いて，Aが記憶する非言語的知識のなかから，銀行は三時に店を閉めることを推論前提として動員するなら，Bの言外の意味が，「銀行はすでに閉っている」ことにあるのがAにも導きだせるだろう。このように意思疎通のためには，認識図式，世界にかかわる基本的知識（原理），信念など，一口で言うとある範囲の＜共有知識＞が話し手同士に分け持たれているのでなければならない。この点では(7)と(8)の解釈上で差別はない。つまり，字義通りの文も隠喩も，それを解釈するには，一定の共有知識が前提されるのである。しかし隠喩の場合と字義的表現の場合とでは，共有知識の使用のされ方に差が認められる。そこで，(7)の真理の問題を誤りなく解く準備として，いささか廻り道のように感じられるかもしれないが，はじめに文字通りの表現における共有知識のかかわり，次に隠喩におけるそのかかわりを調べてみよう。

字義的意味の相対性

文の文字通りの意味（literal meaning）が話し手同士に共有された一群の諸仮定に相対的にのみ定まるという主張，あるいは字義的意味の相対性テーゼがサールによって唱えられている[17]。この主張によれば，文の字義的意味とはあらゆる文脈上の規定を除去した場合の意味のことだという見解[18]は，斥けられねばならない。というのも，そのような除去はサールに言わせればできない相談だからである。たとえば次の文

(10) 猫がマットの上にいる。
　　(The cat is on the mat.)

の文字通りの意味として理解されるものは，猫とマットが地球上ないし地球のごく近くである特有の関係を保ちつつ存在していること，それゆえ決して銀河系外の宇宙に両者があるの

ではないし，あるいまた，地球上に二つのものが存在する場合でも，マットと猫の双方が見えないワイヤーで吊り下げられていて，猫がマットにまったく圧を加えていないなどということもないことなど，一連の仮設をすでに捲きぞえにしている。ここで反論がもちあがるかもしれない。たとえば五歳の小児でも(10)を理解できるだろう。しかし彼が銀河外の宇宙について知っているはずはないではないか。したがって文(10)が今指摘されたような仮設を伴うことはありえない，と。しかしこの反論は相対性テーゼの主旨を誤解している。(10)が文字通り解されるとき，すでに何らかの知識が解釈過程に介入してくる，というのがポイントなのであって，今言及された仮設はあくまでありうる事例にすぎない。小児は銀河系については知らないだろう。しかし代りに彼は，たとえ無自覚であるにせよ，別の仮設をやはり知識のなかに温存しているはずなのである。

文の背景をなす仮設はストローソン流の前提でもなければ，また文の合意の一部でもない。言い換えれば，それは文の意味論的次元には属さず，発言の語用論的次元に帰属するのだ。それが前提に相当しないことは，次のようにして示される。もしも(10)が

(11) 猫とマットは重力場に置かれている。

を前提するなら，(10)が偽であるとき(11)は真でなくてはならない。しかしその反例を次のように簡単に作ることができる。

(12) 猫はマットの上にいない，そして，猫とマットは重力場に置かれていない。両者は宇宙船室内に離れて浮遊している。

次に，仮設が文の含意でもないことは，以下のように示される。もしも(10)が(11)を含意するならば，(10)が真である場合，必ず(11)は真でなければならない。しかし(13)はそれが必ずしも成立たぬことの証拠である。

(13) 猫がマットの上にいるが，猫とマットは重力場に置かれていない。

宇宙船の乗務員は，マットにある姿勢で接触した猫が浮遊するさまを，文(13)でもって描写したのである。

字義的意味の二別

字義的意味の相対性テーゼは，サールも言うように，文について字義的意味が存在しない，

と主張するものではない。それはいわば，運動体の速度が基準系に相対するという理由で，運動というものがない，というのと同様である。しかし問題が残っている。「絶対的区別」と言うさいの，「絶対的」とは強弱二つの意味で解すことができる。それは強い意味では，区別が非歴史的に決定されていて永久に不動であることを言う。弱い意味では，それは，非歴史的に最小限度の区別が決まっているが，この区別と両立する形で意味は歴史的に変化を容れうることを言う。サールはあらゆる文脈を除去したさい文に残された意味という概念を認めないが，これは彼に「絶対的」の二義の混同があるからだろう。この概念は強い意味における絶対的区別をうけつけないが，弱い意味でのそれと両立する。この点を調べてみよう。

語「猫」の語彙項目には最小限〔＋生物〕，〔＋有形物〕などの構文素性が含まれていて，日本語を解する者は，この事実を言語知識の一部として持つのでなければならない。語「マット」についても同様のことが言える。だとすると，日本語の話し手は，

(10)　猫がマットの上にいる。
(14)　生物がマットの上にいる。
(15)　生物が無生物の上にいる。
(16)　有形物が無生物の上にいる。
(17)　何かが有形物の上にいる。
(18)　何かがどこかにいる。

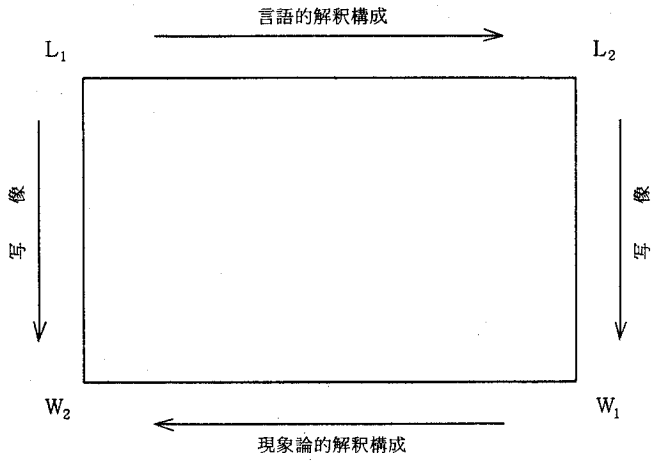
以上の文について，たとえ(10)がいかなる仮設を伴うにせよ，反対に何一つ仮設を考えあわせなくとも，(10)が(14)—(18)を含意することを認めるはずである。言い換えれば，(14)—(18)は(10)の文脈を離れた字義的意味の一部をなすのである[19]。この種の字義的意味をサールの言う字義的意味から区別するため，前者を＜狭義の字義的意味＞，後者を＜広義の字義的意味＞とよぼう。結局サールの相対性テーゼは，文の広義における字義的意味の理解がすでに一群の仮設を土台になされることを明らかにした点で正しいが，しかし狭義における字義的意義を無視し，ひいては，言語能力と百科全書的知識の相対性をまちがって捉えたことにおいて批判されねばならない。さきに述べたように，われわれも言語能力と百科全書的知識の相対性を認める。真理が意味へ効果を及ぼすからである。しかしいつになっても，猫が生物でなくなる時代はこない。語「猫」に〔＋生物〕という構文素性が対応するという知識は，強い意味で絶対的に言語知識に属するのだ。また，この語に〔＋有形物〕が対応する知識も同じ事情にある[20]。こうして，やはりわれわれは最小限度の固定的な言語知識を認めざるをえないのである。

隠喩は真でありうる

急いで放ったままだった問題にもどろう。はたして(7)は真でありうるのか。この問に答えるには，いったい解釈過程のどの段階で問が立てられているかをはっきりさせねばならない，とわれわれは述べた。この注意を銘記しよう。もし解釈の初発の段階にわれわれがいるなら，(7)が真かどうかの問は，実は(8)が真かどうかの問と同じである。というのも，字義性原理によって，まず隠喩の字義的解釈が試みられるはずだからだ。(8)は明らかに偽である。次いで，われわれが(7)の解釈が完了した段階に今達したとしよう。どのようにしてか。われわれは共有知識を検索してそのなかから若干の概念表象を引っぱりだす。ゴリラのいかにも魁偉な体軀，安手の冒険小説の挿絵でよくみた隆々とした筋骨やむきだした牙，それに古いハリウッド映画のイメージ，そうだ，E. ポーが『モルグ街の殺人』で殺害者に仕立てたあの「兇暴な」オラン・ウータンもゴリラの親戚ではないか。こうした表象を下敷にして，殺人犯がゴリラのように咆哮し牙をむき，無力な犠牲者を屠る可能世界が想像裡に喚起されるのである。共有知識の使用仕方は，(7)と(8)とでは明らかに違っている。文字通りの文(8)の解釈に介入する共有知識はたんに記憶の底から浮びあがらせられ，賦活されるにすぎない。言い換えれば，推論に必要な前提としてなにか信念なり仮設なりが再生されるのだ。しかし隠喩(7)の場合ではちがう。今度は共有知識の素材を使って推論の前提が作られるのである。言い換えれば，それは創造されるのだ。想像された可能世界を概念表象の集合とみなすことができる。そこには命題とそうはよべないいわば半命題が含まれている。ちなみに半命題とは，原理的に分析を完全におこなえない思考内容のことである。命題は明確な意味を持ちそれ自体は真か偽である。しかし半命題は両義的で真偽にかんしても曖昧でしかない[21]。今や(7)は確言として，真理の言挙げを伴っている。そして，現実世界よりいっそう拡張された一つの世界に住むわれわれは，ためらわず，(7)を真とみなすのである。こうしてはじめの問は答えられた。(7)は真偽でありうるのだ，と。

創世としての解釈

(7)が真である，とわれわれが裁断したとき，われわれはあたかも創造主のように新たな世界を建て，そこに住んだのである。レヴィンはこうした隠喩解釈のプロセスを巧みに図式化している[22]。これを借りて，われわれの見解と還元論者の見解の違いを明らかにしたい。



この図式にまえにだした例(7), (8)をあてはめてみよう。還元論者は(7)（図式で L_1 に相当する）をまず(8)として解釈し，それが明らかな偽であり発言として有意性に欠けることを認める。もしも発言(7)が真理の言挙げを伴うならば——というのも話し手はあくまで真面目に，憤りつつ(7)と断言しているように思われるからだ——(8)が明らかな偽である以上，(8)は，——ひいては(7)も——それ自体偽ではない別の発言の省略だと見なさねばならないだろう。この点こそ，隠喩が字義的表現へ言い替えうるという，還元論者の要請である。こうして比較説が採用される。(8)は実は「アウル・ネルソンはゴリラのようだ」(L_2) という直喩が短縮されたものなのである。彼らは，このようにして，$L_1 \rightarrow L_2$ という言語表現の手直しをおこなう。ところで彼らの住むところといえば，それは旧態依然たるこの現実世界にほかならないのだ[23]。

けれども，何かを作るというなら，別の可能性が残っているではないか。われわれがたずさえた知識，現実世界 W_1 にかかわる概念図式なり基本的信念なりに修正を加え，そのようにして，世界に生起する事態の方を解釈しなおしてもよいのである。こうしてわれわれは隠喩が描きだす事態を含む一つの世界 W_2 を造りだした。しかもわれわれは，可能世界 W_2 をたんなる可能性の域にとどめておくことに甘んじてはいない。この世界をありありと実感しつつ現実化し，そのようにして，われわれは今やこの世界に住んでいるのである。

「現象論的解釈構成」は隠喩の眼目を明らかにしてくれるだろう。還元論者の言い分だと，隠喩はまったく陳腐なことがらを斬新なことばで表現する働きをするのにすぎないが，われわれの見地からすれば，目覚しいのはことばではなく構想であり世界内の事態なのである。しばしば世間では，詩人は＜見者＞ (voyant) であるとか，詩は一つの世界だ，などと言われてきた。われわれに言わせるなら，こうした評言は文字通りに解されねばならない。

二つの解釈の方途はまったく別のものである。還元論者からその対立者に持ちだされる批判は，しばしば二つの混同の上に成りたっている。ブラックは，隠喩の字義的言い替えが隠喩の「認識内容」を損なうので不可能だ，と主張した[24]。これに疑問を呈して，ワーナーは言う。もしブラックの言い分が正しいなら，隠喩を真とするが，しかしその言い替えを偽とするような真理条件が存在することになるだろう。しかしこの不都合を除くのは難しいことではない。というのも「認識内容」の損失分をつぐなうだけ，言い替えの真理条件へ追加をはかればよいからである。だとすれば，ブラックの主張はこう言うことに帰着する。すなわち，条件を次々に加えていって内容の改善をはかることはできるが，改善の完了を規定する基準が隠喩の言い替えに伴っていないのだ。要するに，言い替えのできるかできぬかは，たんに事実上の問題にすぎないのである，と[25]。このワーナーの論評は，明らかに還元論者の言語的解釈構成に基づいている。しかし当のブラックは現象論的解釈構成を唱えているのであって，この論評は的外れとしか言いようがない。

隠喩は否定しうる

(7)が真理値を担いうる可能性は，談話のさまざまな場面で観察することができる。たとえば(7)に関連して，次のような会話の交換を想定しうるのである。

(19) A：アウル・ネルソンはゴリラだ。そうじゃないかね。こんなに多数の女性を凶悪な歯牙にかけている。

B：いや奴はゴリラなんかじゃない。ゴリラだったら，わざわざ善人を装って女性に近づくことなんかはしないよ。奴はもっと狡猾だ。奴は悪魔だね。

隠喩まじりの文にかんしては，その否定や付加疑問が正則な文を生まないという観察をするむきもあるが[26]，この例はそれが必ずしも正しくないことを証明している。確かに問題がアイロニーならば，言外の意味を直接否定できないように思われる。次の問答を見てみよう。

(20) A：先生のお話はまことに結構でした。

B：いえいえ，そんなじゃありません。

Aは皮肉をこめてこう述べているのである。ではBの発言は何を否定しているのだろうか。それは「まことに結構」ということのアイロニカルな意味を狙うことはできず，その文字通りの意味を捉えてこれを否定するにすぎない。(20)のやりとりは実際にもままありがちである。

BはAの発言の棘に気づかず生真面目に謙遜してみせ，いっそうAの失笑をさそうのだ。アイロニーにおける否定の機制は，しかし，隠喩もアイロニーも同じことばの文彩に含められるからといって，そのまま隠喩にあてはまるわけではない。

言外の意味一般が真理値を持ちえないという原理を立てて，アイロニーにおける否定辞のこうした局限された作用を説明する案もありうる。言外の意味とは，いわばあだ花のごとき真でも偽でもない対象だから，否定の対象にもなりえない，というのである[27]。しかしこの案は，すでにわれわれが確かめたように，言外の意味の一形態である隠喩も真でありうるという事実に反するし，また言外の意味一般が否定にも値しないあだ花だと言うなら，それは言い過ぎであろう。(9)の会話をふりかえって見よう。Bは言外に「銀行はすでに閉っている」と意味しているのであり，この言外の意味は明らかに真理値を持つ。結局，否定は隠喩とアイロニーにかんし異った振舞いをみせるのであって，この違いは，双方の構造そのものに由来するのだ[28]。

隠喩について問い，否定する可能性は，隠喩が真理の言挙げを伴うことの証左であろう。従来多くの人びとは，喩隠についてそうした可能性を観察し，隠喩にも真理を割り当てようと試みたが，そのさい，彼らは隠喩そのものの真理という観念に不条理をみとめ，隠喩を文字通りの表現へ還元しうるかぎりで，間接的に隠喩にも真理を認めたにすぎない。しかしこれでは，隠喩に真理を割り当てたことにならないのは明らかだ。しかしながら，われわれはつねづね，表立って隠喩の真を主張することを，おこなっているのである。たとえば，

(21)　アウル・ネルソンは，本当に（実際に，確かに）ゴリラだ。

という文で「本当に」などの語句は文全体を修飾している。この文の言わんとするところはややぎこちない次の文にほぼ同じだとみなされよう。

(22)　アウル・ネルソンはゴリラだというのは，真である。

隠喩まじりの文が述語「真である」に先立つという点では，文字通りの意味をあらわす文と何の遜色もないのである。

推論における隠喩

意味と真理を担いうる隠喩まじりの文が推論に用いられることは，それゆえ，なんら奇妙なことがらではない。日常の議論や意志決定の拠りどころとなる陳腐なきまり文句を，アリストテレスは＜コイノイ・トポイ＞ないし＜トポス＞と呼んだ。彼の枚挙したトポスのなか

には比喩もまざっている。それを紹介してみよう。ある者が法律を非難して「法律はそれを改正するような一つの法律を必要とする」と言ったのに対して，民会の市民たちが騒ぎたて邪魔をした。そこで彼は次のように弁じたものである。「実際魚どもも〔腐敗防止のために〕塩を必要とするのだ，彼らが塩水の中で育てられたものであるのに，塩を必要とするなんて，ありそうなことでもなく，信じられることでもないだけれど」[29] したがって，法律の腐敗を防ぐための法律がいる，というわけである。これは，ことばの文彩が弁証に関与する事実に興味を持った古代の哲学者から引いた，ほんの一例にすぎない。文彩，わけても隠喩が論証に使われる事例にことかくことはない。もう一つだけ，隠喩的推論の完備したひな型をあげてみよう。

(23) 私たちの愛は二人で作る芸術作品だ。
私はすぐれた芸術家ではない。
もしも私たちの愛が二人で作る芸術作品で，私がすぐれた芸術家ではないならば，私たちの愛はまずい芸術作品だ。

ゆえに，私たちの愛はまずい芸術作品だ。

前提に隠喩が登場しているが，健全な結論が導かれている点で，この推論には何の瑕疵もない。言い換えれば，隠喩も通常の論理法則に従っているのであり，その意味で，論理学者の言う＜命題＞に匹敵する論理性の有資格者である。またこの推論を見ると，隠喩は仮言形式の前提のなかでは主張されずにたんに呈示され，別の前提では主張されている。この点でも命題の振舞いと異なるものではない。

隠喩だけに合致する特別誂えの論理を用意するのは，隠喩に特有の真理を想定するのと軌を一にする誤りである。それはたんに思惟経済の原則からして，不必要なものの数を増やすことに益がないから，という理由によるばかりではない。特別仕立ての真理と論理のモデルが提出されぬあいだは――それをおこなう義務があるのは，そうしたものの主張者であってわれわれではない――隠喩の真理と論理が通常のものの名の下に了解しうるかぎり，そうした仮設物なしですましうるし，そうしなくてはならないのだ。

またここで，次のような反論がなされるかもしれない。推論(23)は確かに妥当である。しかし論理によって統御されているのは，前提の字義的意味である。それをわれわれは無視して，結論を隠喩として解釈し，この解釈が推論全体にまで及んでいるかのように思いこんでいるだけだ，と[30]。しかしこの反論は不都合である。第一前提「私たちの愛は二人で作る芸術作品だ」といわば本気で主張している人間をつかまえて，その主張はそのままでは主張の体を

なさない，ときめつける理由であるだろうか。役者が劇中でこの前提と同じ科白を述べたとしよう。このときは，なるほど役者その人（劇中人物ではない）は主張をおこなってはいない。しかしこの推論で第一前提を述べる者は，決して主張のふりをしているわけではないのである。ただし彼は，前提の字義的意味を主張してはいない。その意味で字義性原理はすでに破棄されている。しかしこれは，前提がまさに隠喩であることの一つの条件にすぎないのである。

隠喩の含意

隠喩が真理と意味において字義的表現と遜色がないことは，さらに，＜含意＞の点でも確かめることができる。たとえば隠喩＜愛は二人で作る芸術作品だ＞には，次のような含意が伴っている[31]。

愛は作品だ。
愛は協力を要求する。
愛は献身や妥協や忍耐を要求する。
愛には共同責任が伴う。
愛は美的に経験されるものである。
愛はそれ自身で価値を有する。
愛には創造が伴う。
愛を作る定った方式はない。
愛はそれぞれが唯一独自である。

これら含意のおのおのがまた含意を伴っており，その全ての含意が適宜切りつめられ，ある大いさの整合的な含意体系を形造っている。こうしてできた体系は全体として愛のさまざまな象面に適うように，むしろ愛を仕立てるのであって，まさしく人はそのような愛を経験するのである。ところで問題の隠喩は，その全部の含意を通用させるわけではない。たとえば次の含意は有意性を欠くとして捨てられるのである。

愛は壁に飾られることがある。
愛は有体物である。
愛はオークションで値がつけられることがある。

ある含意にスポットライトをあて，別の含意は暗がりに放置するという点は，隠喩的含意

のいちじるしい特色である。では文字通りの表現には，これに類似の性状はないのだろうか。次の例を見てみよう。(24)は文字通りの表現であるが，その特色は，そこに自然種の名が含まれていることである。

(24)　タマは猫である。
(24a)　タマは動物である。
(24b)　タマは哺乳類である。
(24c)　タマは呼吸をする。
(24d)　タマは自動機械ではない。

(24)は(24a)—(24d)を含意している。換言すれば，(24)であり(24a)ではないような事態は不可能である（他の含意についても同様）。ところが，(24)は以下を含意していないのだ。

(24e)　タマはにゃーんと鳴く。
(24f)　タマは四つ足である
(24g)　タマは髭をたてている。

というのも，タマは唖かもしれないし，事故にあって四肢が揃ってはいないのかもしれないからである。芸術作品について真であることがらの全部が必ずしも愛については真だとはいえないというなら，猫の持つ特性の全部をタマが必ずしも持つわけではない点で，隠喩的含意と文字通りの含意とはよく似ているように思われる。

以上の観察でもってわれわれが強く示唆したいのは，あるものが芸術作品であることの意味にせよ，あるものが猫であることの意味にせよ，一般にSがPであることの意味は，「SはPである」が文字通りの表現であると隠喩であるとにかかわらず，その意味たる資格において差別がないということ，このことである。もちろんわれわれはこの主張を証明したわけではない。ただこの類似は決して偶然ではないと思われる。のちほどわれわれは，この類似が言語の本性そのものに根ざすことを，隠喩における指示の問題を手がかりに，いくらかでも明らかにするつもりでいる。

隠喩の分類

(7)が真でありうることは，以上でまず疑問の余地なく示された。一般的に言えば，隠喩にかんしてその意味と真理を語ることに，われわれは少しもひけ目を感じなくともよいのだ。

しかし隠喩の真理一般を語るには，実は，まだ準備が不足なのである。(7)が真であるためには，話し手同士が新たに構築された可能世界を自分たちの住家にしなくてはならない。そうでなければ，(7)の真理はたんにかりそめのものでしかないだろう。すなわち，それは端的に真理であるのではなく，あたかも真理であるかのようなもの，真理の仮象にすぎないだろう。ところが隠喩によっては，真理の仮象以上のものを要求しない種類も存在する。あとで詳しく触れる＜詩的隠喩＞がそれである。問題は隠喩の種類によってその真理問題の問われ方がおのずと別だということである。そこで，この機会に，真理という観点からする隠喩の分類を考えてみよう。

しばしば＜死喩＞（dead metaphor）ということが言われる。イメージの喚起力を失い文字通りの表現に堕した隠喩のことである。その対立物が，いうまでもなく，＜活喩＞(living metaphor）である。一方の極に完全に死んでしまった死喩（たとえば「誕生日が来る」）を置き，他の極に活喩を置けば，両極の中間にさまざまな程度で生きている隠喩が並ぶだろう[32]。そこで問題は隠喩の生命をどのような基準で判定するかである。ブラックは隠喩の分類について二つの基準を提案しているが，しばらくわれわれもこれに従うことにする。第一に生きた隠喩はそれに代るものがないという意味で必然的でなければならない。第二に生きた隠喩は含意が豊かでなければならない。二つの要件をそなえた隠喩を，ブラックは＜強力な＞と呼んでいるが，この種の隠喩を一方の極に置くことが許されるだろう[33]。

死喩／活喩という区分は隠喩を考察するさい問題によっては確かに有益だろう。真理の問題にかんして言うなら，完全に死んでしまった隠喩は，字義的表現とえらぶところはないのだから，隠喩の真理の問題から除外してしまえる。したがって多かれ少かれ生きている隠喩だけが問題になるだろう。ただ次のことに注意しなければならない。死喩といえども，かつて一度は，どんなにわずかな時間にせよ生きていたのである。「釘の頭」，「あたたかな心」，「車が来る」など，今では生気がうせてしまっているが，これらの表現がはじめて言語世界へもたらされたその当時は，かけがえがない，豊かな含蓄をそなえた活喩にちがいはなかったのだ。そこで以上の区別に代えて，もう一つの隠喩の類別をここに導入しよう。隠喩がまさにその意味作用を発揮しているさなかで捉えられるかぎりでの隠喩を，われわれは＜実演する隠喩＞(performing metaphor）とよぼう。そして，隠喩の働きがすでにすんでしまったことを背景に，安んじて隠喩として流布されている種類を，＜実演された隠喩＞(performed metaphor）とよぼう。前の区別が隠喩の表出能力を尺度とした経験的分類であるのに対し，この区別はそうした尺度にかかわりのない理論的分類にほかならない。

隠喩の考察にあたり，さらに第三の区分が必要であろう。ある種の隠喩はそれが隠喩であることの自覚が話し手同士に表立って伴っていない。この仲間を＜黙示的隠喩＞（implicit metaphor）とよぼう。たとえば「問題を解く」，「時間が足りない」など。＜問題＞は固く

結ばれた糸や氷のようなものではないにもかかわらず，それを解く，とわれわれは言い，しかもこれが隠喩であることには気づかない。死喩とこの部類の隠喩とは重なる場合があるが，しかし二つはあくまで別である。たとえば「冷血漢」はほとんど死んだ隠喩にすぎないが，これが隠喩である事実に気づかぬ者はいないだろう。反対に，それが隠喩であることの自覚があらわに伴うものを＜明示的隠喩＞（explicit metaphor）とよぶ。詩人が新たに作りだす隠喩，諺（たとえば「鶴の一声」）などはこれに数えられる。また，明示的だからといってその隠喩が生動しているとは限らない。「冷血漢」は死んでいるが明示的である。

三つの区別のうち第二の＜実演された／実演する＞は，あらゆる隠喩に適用される理論的区別であるから経験的な類別の能力はないので，これをはずして残りの二つの区別を組み合わせることにより，われわれは隠喩の四つの種類（Ⅰ－Ⅳ）を得ることになる（下図参照）。それぞれについては機会に応じて詳しく触れることもあるだろう。ここではおのおのの例を一つだけあげておこう。「冷血漢」（Ⅰ），「愛は芸術作品だ」（Ⅱ），「議論を闘わせる」（Ⅲ），「誕生日が来る」（Ⅳ）。

	死	活
明示的	Ⅰ	Ⅱ
黙示的	Ⅳ	Ⅲ

詩における隠喩

四種類の隠喩はさまざまな機会にさまざまに使用される。日常の談話，議論や演説，情報の伝達，報告。科学論文のなでさえ隠喩は使われる。これらの使用はすべて，隠喩にも真理の言挙げが伴うという点，言いかえれば隠喩まじりの文に確言という発語内的な潜在能力が含まれるという点で一括りにすることができる。しかし他面で，隠喩は文学，とくに詩において多用されている。当然このような隠喩についても，真理の問題を問えるのではないだろうか。詩における隠喩は真理の担い手の資格を持つのか，持つとしたらどのようにしてか。

しかし，この問の立て方が性急すぎた事実はすぐあらわれる。小説にも隠喩は使われるが，その一行を取りあげて，この文は真か，などと読者は訊ねはしないのである。なぜなら，作

品全体が作り話であるという約束のもとに，読者と作品とが向い合ったからだ。もっとも，小説と一口に言っても，私小説，実録もの，ルポルタージュ小説など，たんなる虚構の枠に収まりきらないジャンルもあるし，たとえ作り話でもそれが事実を諷意するような作品の場合には，やはり問題は微妙になってくる。ここでは細かな議論の余裕はないし，またその必要もないだろう。問題は詩的隠喩の真理問題を，従前の見解から基本的に，どのように扱いうるかを調べることである。そこで話を文学のなかでも詩に限り，しかも作品に虚構であるしるしが歴然と伴っている叙事詩（たとえば『イーリアス』）と劇詩を取り除けよう。残されたのはいわゆる抒情詩であろう。しかしそもそも詩の範囲をどう限ったらよいのか，という疑問が生じるかもしれない。詩の全部が確定していれば，そこから明らかに虚構の詩作品を差しひくことによって，虚構ではない詩が残されるかもしれない。しかし格言，商業宣伝文，形而上学者の文章などは詩に含まれるのかどうか。そもそも詩とは何か。散文詩などというものさえある。われわれは詩の定義からやり直さねばならないのではなかろうか。

しかしわれわれの問題にとって，詩の定義に手をつけることは不要である。なるほどわれわれは詩とは何かを知らないが，したがって，ある作品が詩かどうか決められぬ場合がありうるが，しかし，明らかに詩でしかない例を知ってはいる。言いかえれば，何が詩かを知っているのである。たとえば

炎も煙ももはや私を逃れて行った
私はみすぼらしい骸骨だ
だが窯の中で私はなほも燃えに燃える
悲哀も笑ひもなくただ在るままの形して嘗て在ったよりも怒り煌めき　（丸山　薫）

はそうした一例である。この詩は，『イーリアス』や『ハムレット』が虚構であるという意味では，虚構ではない。アガメムノーンも不死の名馬クサントスもこの現実世界に存在しなかった。その意味でこのギリシャ最古の叙事詩は作り話である。しかしこの詩にこれと同じような意味で，これが作り話だと断定させる手掛りは何もない。炎も窯もないのではないか，と詰問されるだろうか。しかしそれは隠喩の一部なのである。唯一問題になりうるのは「私」という一人称代名詞だろう。読者はこの詩を一読して，「私」が詩人その人を指すのだと了解する。しかしルソーが一人称で必ずしも真実を語らなかったように，また一人称の作り話など珍しくもないように，たとえこの詩が一人称で語られても，「私」が詩人を指す保証はどこにもない，と疑うこともできる。

しかしここでの問題は個別の詩について，それが虚構かどうかを決める手続きを明らかにすることではない。虚構ではない詩というカテゴリーの可能性，これが問題なのだ。われわ

れはそれが可能だと考えている。むしろ見方を反転してみたらどうであろうか。確言の潜在能力を伴う隠喩まじりの文から，今，詩の領域にもそのような文の同類を捜そうとしてきたのだが，逆に視角を設定してみよう。真理の担い手の資格を殊更に疑ったこともない隠喩まじりの発言を，日常，人びとは頻繁に取り交わしている。そうした発言のそれぞれが，実は，掌にのるような小規模の詩作品にほかならないのだ。この意味で，隠喩を使いうる程度の言語能力の持主は，みな（可能的）詩人である。言語が隠喩しうる力から直接芽ばえたような詩といえばさしずめ

私の耳は貝のから
海の響をなつかしむ　　（コクトー）

などがそれにあたるかもしれない。

世界創成は十全か

もしも作り話ではない詩（短く＜非虚構詩＞とよぼう）という部類が成立するなら，そうした詩にかんする真理問題はどこへ帰趨するのだろう。非虚構詩は，定義上，真理性の要請ないし真理の言挙げを伴う。では，非虚構詩を日常の談話でやりとりされる隠喩まじりの発語とまったく同じ扱いをしていいのだろうか。

詩は（非虚構詩か否かを問わず）日常言語中の隠喩まじりの文と，文体の点で，あきらかに差を示す。散文が歩行なら詩は舞踏である。この差異を重大にみたレヴィンは，詩における世界創成が十全で（adequate）あると考えた。「十全」という言い方はわれわれのものであるが，その意味を説明するには，レヴィンも引いているある区別をさきに理解しておねばならない。レイコフは次の文に二つの解釈の余地を認めている。

㉕　私がピアノを弾いている夢をみた。
（I dreamed that I was playing the piano.）

第一の解釈にしたがえば，㉕の語っているのはこうだ。夢の世界で私はピアノを弾いていた，そんな夢を私は見た，というのである。初めのIは現実世界に住む人物，したがって㉕の発語の時には目覚めている人物を指す。彼は己れの夢の観察者として振舞いながら，夢の内容を報じているのである。こうした解釈を，＜観察者の読み＞（observer reading）とよぶ。さて第二の解釈によれば，㉕の語るのはこうである。夢の世界に住みこんだ私は，そのときピアノを弾いていた，ということ。そこに登場する一人称代名詞は，夢の世界あるいは

可能世界に自ら参入し，そこを住家としたペルソナを指している。これを＜参加の読み＞(participating reading)とよぶ[34]。

レヴィンは，詩が生成されるさい，その深層構造において，表層構造では消失する

㉖ 私は……という世界を（そこに住って）想像する。
(I imagine (myself in) 〔……〕 a world in which……)

という句が詩のはじめに立つ，と見なす。＜想像する＞(imagine)には＜参加の読み＞が適用されねばならない。詩人はある想像世界を繰り広げてみせる。しかしそれはたんに世界の外部からそれを指さす第三者としてではない。彼は世界を創成しつつただちにその世界の住人として振舞うのだ。この事態を一歩さがって眺めるなら，㉖の「私」は詩人の想像世界へ投射された彼のエゴあるいはペルソナを指示するのでなければならない。こうして，たとえばまえに掲げた丸山薫の詩は，その深層構造においては，

私は次の世界を（そこに住みつつ）想像する：炎も煙ももはや私を逃れて行った／私はみすぼらしい骸骨だ（……）

という構成をとるのである[35]。可能世界の想像が想像力の主体のその世界への住みつきをただちに伴うような世界構成を，＜十全である＞とよぼう。レヴィンによれば，詩においては世界構成はつねに十全なのである。

この仮設のもとで，詩の真理問題はどうなるだろうか。かつてフレーゲは外延を欠く名辞を含む文の処理の一法を示した。「現在のフランス王」とか「ペガサス」など空なる名の存在は日常言語の不完全さの徴候であるが，しかし「論理的に完全な言語」のなかにそうしたものがまぎれこんではならない。それら片輪の名を除去するには，そうした名のそれぞれに，適宜なにか対象を約定によりあてがえば，面倒は解消するだろう[36]。同様に，詩に出るあらゆる名や記述に指示項を充当し，また述語にも外延を割りふってやろう。これは，世界構成が十全であることからの当然の要請である。こうすれば，詩が語りだす事態はすべて，つねに成立している。こうして，レヴィンによれば，詩においては，文はみなつねに真でしかありえないのである[37]。

言語の形態としての詩

われわれはこの考えをうけいれることができない。詩でありさえすれば，つねに世界創成が十全であると見るのは，詩をかいかぶりすぎている。たしかに詩は日常言語と明らかな差

異を呈するが，しかしこれは絶対的な差ではない。すでに述べたように，日常会話における隠喩も小さな詩作品とみなすことができる。詩の文体と詩ならざる表現の文体を隔てるものは，世界創成の十全性といった絶対的基準ではなくて，韻律，隠喩をはじめとする諸もろの文彩，ことばの響きや場合によっては語の形態など，さまざまな手段の使用の如何である。これらの手段は日常言語にも使われているから，詩と詩ならざる表現は，一つの連続した力動を形造る同じ言語作用の発現の異なった二形態だと言うべきである。

レヴィンは語句㉖に伴う発語内力がオースティンの言う＜行為に言葉を合わせる＞(suiting the action to the word) ものに該当するとみている。たとえば「私は x を次のように定義する」と語る行為は，それ自体定義の発語内力を持たない。この発言につづく「x は y である」の部分が実際に定義を行うのである。このように，はじめの発語は，たんに定義という行為に合わせて言葉を前置きにおいているのにすぎないのだ。しかし，＜行為に言葉を合わせる＞行為は，程度がすすむと，それだけで問題の行為の実演へ移行することがある。たとえば「私は x を y と定義する」と言えば，この発言はこれだけで定義を行っているのである[38]。同様に㉖を語ることは，それ自体，世界を創成することには匹敵しない。ところがこれも程度が進めば，そのあとに連ねられる語句ともども，一つの世界の想像を遂行しおおせるのである。

たとえレヴィンのこの指摘をうけいれるとしても，世界創成の十全性まで認めねばならないわけではない。あやふやな定義もあれば誤った定義もある。これと同じで，いくら詩人が想像世界へ参入しそこに住むことを語っても，そう語ることとと，詩人のエゴがそのよう世界に住みおおせたこととは別である。詩では何もかもが全部真であると見るのは，詩を買いかぶっているが，またある意味では，詩を軽んじてもいる。全てが真だということは，偽の能力を詩に拒むことであり，詩に割かれた真理が日常的言明のリアルな原理とは異なる特種な真理でしかない，ということでもある。それは「詩的真理」であり，時には並の真理よりいっそう啓示に富む高級な真理だと持ちあげられるかもしれない。しかしわれわれは，真理に貴賤があろうとは信じない者である。

レヴィンの論法を使うと，詩以外の通常の言明もやはり同じようにつねに真でしかありえないだろう。たとえば私が「外は雨が降っている」と言明したとせよ。その論法を借りると，この言明は深層構造で次の形態をとっていたと見ることができる。

㉗　私は次の事実を見る：外は雨が降っている。

これに＜参加の読み＞を施してみよう。「私」はいましも雨が降っている世界に参入し，そこに住んでいる私のペルソナを指示する代名詞にほかならない。したがって，㉗が語る降雨

は事実以外のものではないのである。どこがまずいのかは明らかだろう。世界創成の十全性ないしペルソナの世界への住みこみの完了という仮説には理由がない。詩の場合にも事情は同じである。

野性の真理

非虚構詩にも真理の言挙げは伴っている。それは並の隠喩まじりの文と同様真理の担い手でありうる。しかし，詩に格別の「詩的真実」を用意する必要はない。隠喩まじり文が真であることもあれば偽であることもあるのと同じように，詩も真であったり偽であったりする。そうでなければ，詩の巧拙ということもありえず，詩作品の批評も成り立たぬだろう。というのも，隠喩の適切さの一つの条件はその隠喩が真であることだからである。さきに挙げた(19)の対話をもう一度見てみよう。対話者BはAの用いた隠喩が不適切であることを言い，代案を差しだしている。Bに言わせるなら，殺人犯をゴリラに喩えるのは偽なのである[39]。隠喩を詩のかけらのようにみなすわれわれの見地からするなら，隠喩の適切さの一条件がその真にあるという事項は，言うまでもなく，詩にもそのままあてはまる。

隠喩まじりの文は意味を有しまた真でありうるし，また非虚構詩も隠喩を用いた詩句にかんするかぎり，意味や真理の能力にかんし何の遜色もない。ただこれまでは，この点の可能性を強調しようと努めてきて，字義的文と隠喩まじりの文の差に十分注意を払わなかったのは，やむをえぬことであった。この機会に，今度は両者の違い――それぞれの意味と真理にかかわるかぎりにおける――につき，明確に述べておきたい。隠喩の生成と解釈には必らず＜呼び起し＞という想像力に宰領された働きが介入する。呼び起しの諸契機には，一方である文化に直接結びつく公共的・慣例的なものもあれば，他方で個人の経験や能力に結びつく，いわば特異質に含められるものもある。したがって，話し手同士が合作する想像世界はずれたりよじれたりしながら，また限界も定かならぬまま，構築されるのである。話し手の作った隠喩の真意が聞き手にそのとおり伝わることは，希有とは言わないまでも，そうたびたび生じうることではない。換言すれば，二人が同一の世界に住むことは，つねに可能とはかぎらないのである。それだけではない。隠喩が聞き手により解釈される以前に，話し手の許で，すでに本質的両義性という性状が隠喩にはまつわっているのだ。というのも，話し手が隠喩を生産しつつ住む世界は，いわばユークリッド幾何学の「世界」が明らかな限界と構造を有するという意味では，いささかも明確ではないからである。しかしながら，われわれが住む世界とは，土台，数学が描くような結晶性の世界ではない。それはいわば急ごしらえで補修のあとのある世界，つねに間に合わせの不十全な世界でしかないのだ。隠喩的表現はしばしば両義的である。それゆえ，経験論者は隠喩を論証に交えてはならぬと厳に戒めた。詩作品

は何通りもの解釈を許すことが多い。それが詩を味わう楽しみの一つでもある。公平に見て，隠喩における真理は<野性的な真> (wildly true) であろう[40]。しかしながら，実を言うと，そもそも非隠喩的な，文字通りの真理にもこうした野性の痕跡は色濃く残っているのである。

〔註〕

1) ホッブス，『リヴァイアサン』，1966，河出書房新社，第一部第四章。
2) 同書，第一部第五章。
3) Locke, J., *An Essay concerning Human Understanding*, ed. by P. H. Nidditch, 1975, bk. Ⅲ, ch. X, §34.
4) 菅野盾樹，「文彩」，『年報人間科学』第3号，1982，大阪大学人間科学部社会学・人間学・人類学研究室，第一章参照。
5) Loewenberg, I., 'Identifying Metaphors' in Johnson, M. (ed), *Philosophical Perspectives on Metaphor*, 1981, p. 172. ただし同人はこれより以前にものした別の論考 'Truth and Consequences of Metaphors', *Philosophy and Rhetoric*, vol. 6, no. 1. (1973) では異なる見解を示していた。すなわち隠喩にも真理値を許容していたのである。
6) Loewenberg, I., 'Identifying Metaphors', また Black, M., 'More about Metaphor' in Ortony, A. (ed.), *Metaphor and Though*, 1979 などの見解。この問題については，菅野盾樹，「文彩—隠喩の存在とその同定—」，1983，大阪大学人間科学部紀要第9巻，第四章を参照。
7) たとえば Davidson, D., 'What Metaphors Mean' in Sacks, S. (ed.) *On Metaphor*, 1979, p. 29 にそうした見解が示されている。
8) たとえ文法に語用論的規則を追加しても，隠喩解釈のアルゴリズムが得られないことには変りがない。
9) Ryle, G., 'Category' in Ryle, G., *Collected Papers*, vol. Ⅱ, p. 174, p. 179.
10) Gochet, P., *Quine en perspective*, 1978, p. 129. また Cohen, T., 'Figurative Speech and Figurative Acts' in Johnson, M., (ed.), *Philosophical Perspectives on Metaphor*, 1981, p. 192, p. 198, n. 8 にも類似の考えが見られる。
11) Smith, N. and D. Wilson, *Modern Linguistics*, 1979, ch. 2 に言語知識にかんする議論がある。
12) 当座の語義の隠喩的転用が字義性を得るに至るプロセスについて次が詳しい考察を行っている。Levin, S. R., *The Semantics of Metaphor*, 1977.
13) Cohen, T., 'Notes on Metaphor', *Journal of Aesthetics and Art Criticism* 34, no. 3 (1976), p. 252.
14) Binkly, T., 'On the Truth and Probity of Metaphor' in Johnson, M., *Philosophical Perspectives on Metaphor*, 1981 を参照。
15) 牧逸馬，「都会の人類猿」，『浴槽の花嫁』所収，1975，社会思想社。
16) Récanati, F., *Énoncés performatifs*, 1981, p. 154, p. 211 seq.
17) Searle, J., 'Literal Meaning' in Searle, J., *Expression and Meaning*, 1979.
18) サールは多分カッツの見解を念頭に置いている。たとえば Katz, J. J., *Propositional Structure and Illocutionary Force*, 1980, p. 14 を参照。
19) 含意ないし伴立 (entailment) という概念によって，どのような文脈からも孤立した文の意味を規定しうるという見解は，基本的には正しいが，ここには言及しない難点を伴う。どんな問題が残るか，どのようにして問題を除去しうるかについて以下を参照。 Smith, N. and D. Wilson, *Modern Linguistics*, 1979, ch. 7; Wilson, D. and D. Sperber, 'Ordered Entailments: An Alternative to Presuppositional Theories' in Oh, C.-K. and D. Dinneen (eds.), *Syntax and Semantics* 11: *Presuppositions*, 1979.
20) この観察に対応する形而上学説がいわゆる本質主義 (essentialism) である。すなわち，事物にはそれを欠くと己れの存在を失わざるをえぬような属性があるという教説で，周知のようにアリストテレスにさかのぼる。近年似たような教説がクリプキやパトナムにより唱えられた。 Kripke, S., 'Naming and Necessity' in Davidson, D. et al. (eds.), *Semantics of Natural Language*,

1972; Putnam, H. 'The Meaning of "Meaning"' in Gunderson, K. (ed.), *Minnesota Studies in the Philosophy of Science* Ⅶ: *Language, Mind, and Knowledge*, 1975 など参照。ただし本質主義にはクリプキの理解とは異なる側面がある。この点は菅野盾樹,『我, ものに遭う』, 1983, 新曜社, 第Ⅱ部に詳叙されている。

21) Sperber, D., *Le Savoir des anthropologues*, 1982, p. 70 seq. を参照。

22) Levin, S. R., 'Standerd Approch to Metaphor and a Proposal for Literal Metaphor' in Ortony, A., (ed.), *Metaphor and Thought*, 1979, p. 132. レヴィンは前掲書 (註12) でもこのプロセスを詳説している。

23) オルスキャンプは通常の還元論者のように隠喩をたんに直喩へ書き直すことをせず, 第二階述語論理で表現することによって隠喩に真理を確保しようとした。しかし隠喩が実は略された直喩であるという視角は還元論者と共有している。彼の見地はむしろ後述の「現象論的解釈構成」に与するのではないかと, われわれは疑っている。 Olscamp, P. J., 'How Some Metaphors May Be True or False', *Journal of Aesthetics and Art Criticism* 29, no. 1 (1970) を参照。

24) Black, M., 'Metaphor' in Black, M., *Models and Metaphors*, 1962, p. 46.

25) Warner, M. 'Black's Metaphors', *British Journal of Aesthetics* 13, no. 4 (1973), p. 368.

26) Loewenberg, I., 'Identifying Metaphors' in Johnson, M., (ed.) *Philosophical Perspectives on Metaphor*, 1981, p. 181, n. 70.; 安井稔,『言外の意味』, 1978, 研究社, 27章。

27) 安井稔, 前掲書, p. 174.

28) 場合により否定は隠喩の言内の意味にまで及ぶ。たとえば次の対話を見よ。
「死んでしまった鳥にうたわせることができるか」
「栄さんは鳥でもないし死んでもいないわ」 (山本周五郎『さぶ』)
この否定は相手と想像力の共働など断乎なすまいというにべも無い拒絶であり, 同じ世界に共棲はまっぴらだという決然たる斥けである。

29) アリストテレス,『弁論術』, 1400a10-15.

30) 二つの可能性がある。一つは, 推論はたんに字義的意味そのものにかかわるとする見方。この場合, すぐ確かめられるように, 前提は偽で結論も偽であり, なるほどこの推論は妥当である。二つは隠喩をすべて字義的な直喩へ言い替え, 推論はこの翻訳に適合すると見る仕方。もちろんこれでもこの推論は妥当性を持つ。

31) この例は次から採られた。 Lakoff, G. and M. Johnson, *Metaphors We Live By*, 1980, p. 139 seq.

32) Loewenberg, I., 'Truth and Consequences of Metaphors', *Philosophy and Phetoric* 6 (1973), p. 33 にこのアイデアがでる。

33) Black, M., 'More about Metaphor, in Ortony, A., (ed.), *Metaphor and Thought*, p. 26 seq.

34) Lakoff, G., 'Counterparts, or the Problem of Reference in Transformational Grammer', *National Science Foundation Report* 24 (1970). Levin, S. R., *The Semantics of Metaphor*, 1977, p. 117 seq に引用。

35) Levin, S. R., *ibid.*, p. 116 を参照。

36) Frege, G., 'Über Sinn und Bedeutung' in Patzig, G., (Hrsg.), *Funktion, Begriff, Bedentung*, 1969, S. 55 seq.

37) *Ibid.*, p. 122.

38) Austin, J. L., *How to Do Things with Words*, 1962, p. 65.

39) Olscamp も, 隠喩の適切さ (aptness) の一条件にその真理を教えている。たとえばチャーチルはアトリーを称して a "sheep in wolf's clothing" とよんだ。この隠喩はアトリーの本質的な柔和さを言わんとしたものなのである。しかしこの隠喩は適切ではない。というのも, アトリーは決して「臆病」(sheepish) ではないからである。つまりこの隠喩の不適切さはそれが端的に偽である点に起因するのである。*ibid.*, p. 82 参照。

40) Cohen, T., 'Notes on Metaphor', *Journal of Aesthetics and Art Criticism* 34, no. 3 (1976), p. 257.

HOW METAPHORS MAY BE TRUE

Tateki SUGENO

Many authors give the negative answer to the question whether mataphors may be said to be true or false because what a metaphor means is desperately vague and imprecise.

Their conception has a presumption that in order to give the truth-value to an utterance its precise meaning should be settled in advance. This presumption, however, has no validity. Some novel discovery about a fact can give effect to the meaning of nonsensical sentence. For instance the sentence "England came from the Continent" seems to be without sense because England cannot "move". Nevertheless the new geologic theory confers a sense on this kind of sentence.

Some theorists, who admit a truth-value for metaphorical utterances, do great damage to them reducing them into literal expressions to secure the quality of being true or false for them.

To avoid theoretical confusion a question should first of all be answered. The interpretation of metaphors, as a process, has to take several steps. At which step is the problem to be examined ? If we examine it at the last step, in other words, at the moment when a metaphor has received a definite phenomenological interpretation, it is able to be true or false.

Metaphors, if interpreted phenomenologically, have no queer logical properties in comparison with literal expressions. They admit negation. They are used in sound inference. They have various entailments like literal expressions. In these respects metaphors, so to speak, have "literal" meaning.

We can extend our research to the metaphoric poem. We posit the category of non-fictional poem. In regard this kind of poem, the same conclusion can be ascertained as we get in case of ordinary metaphors.